やさしさが広がって

大更小学校　二年　やなぎや　ひかる

このお話を読むと、心がほっとします。ララが、はっぱにやさしく声をかけるからです。とくに、夜の月が出てくるときにっおやすみ、みどりのともだち。と声をかけるところがすきです。ララにとって、はっぱはだいじなそんざいだったのだと思います。

ララが、はっぱに声をかけたら、はっぱがぐんぐんのびて家をかこみました。とてもふしぎだったけれど、どうしてそうなったのか考えてみました。きっと、はっぱは、ララがいつも声をかけてくれるから、うれしかったのだと思います。はっぱにも気もちがあるかどうかは分からないけれど、はっぱも生きているので、いいことばかどうか、分かると思います。わたしは、いやなことばをかけられると、心がくらくなります。ざやくに、いいことばをかけられると、心がぱあっと晴れたようになります。心の中がぜんぜんちがうの

です。わたしが育てているひまわりも、たおれかけたときにやさしく声をかけておせわをしたら、その後ぐんぐんまっすぐのびていきました。やさしさは人にもしょくぶつにもつたわると、わたしはしんじます。

ララのまほうのことばは、お母さんのこともかえてしまいました。ララがはっぱのことをやさしく育てていたことを知ったから、お母さんの心も、イライラから明るい心にかわったのだと思います。ララのまほうのことばがはっぱにつたわって、お母さんにもつたわって、町のみんなにもつたわっていったと思います。まわりのみんなが楽しい心になって、本で見たはい色の町は、にじ色にかわっていったんじゃないかなと思いました。まるで本当にまほうをかけたみたいです。

この本を読むたびに、わたしもやさしいことばをかけたくなります。わたしと同じようにかんじる人がふえて、やさしいことばが広がって、それがまたべつの人に広がって、や

さしい気もちがどんどん広がって、そしてせかい中がやさしくなっていくとうれしいです。

ダンゴウオとわたし

黒沢尻西小学校　二年　青木　なずな

1

「わぁ、かわいい。」

教室のはじっこにある本から、とてもかわいい魚がこっちを見てきた。名前はダンゴウオ。魚なのにおよぎがにが手。とても小さくて、大人のおやゆびのつめくらいしかない。ダンゴウオの海ってなんだろう。ダンゴウオがたくさんすんでいる、きれいな海かな。本をひらくと、思っていた海とはちがった。

2

つなみでながされてきた人工ぶつがたくさんある。中には、スイミーのテストもあった。わたしと同じ二年生の子の家もながされたのかな、とこわくなった。魚もほとんどいなかった。およぎがにが手なダンゴウオがぶじかしんぱいになった。どうにか一匹生きのこったけれど、すみにくい海にかわってしまって、ダンゴウオもさびしそうだった。それでも、赤ちゃんダンゴウオは、かわってしまった海の中で、お気に入りのばしょを見つけて生活

した。ワカメも車のホイールからめを出した。

「どうにか生きのこるぞ。ここからでも生えるんだ！」とがんばって生きようとする生きものたちから、わたしは元気をもらった。

わたしは四月に、みやこからきた上にてん校した。ともだちはたくさんいたし、海はきれいだし、みやこが大すきだった。きた上には、ともだちがあまりいないし、どんな学校かわからないし、ふあんでさびしくて、ないた日もあった。でも、いまはすこしなれてきた。じゅぎょうでいろいろない見を聞いたり、先生ともだちのやりとりを聞いてわらったりすることがたのしい。ここでもがんばれるときえるようになってきた。新しい海でもあきらめなかったダンゴウオの海のなかまたちと、新しい学校でがんばろうとするわたしは、なんだかにている気がする。

ダンゴウオは、まっ赤にかがやくいのちをつなげようとしていた。かわいいだけじゃなくて、かっこいいと思った。わたしも、ダン

6　　5

ゴウオみたいに、つらいときでも、じ分らしくがんばっていきたい。

がんばりはむだじゃない

奥州市立胆沢第一小学校
四年　宮川　祐奈

どんなにがんばってもできないときがある。一生けん命練習したけれど、水泳のとっくん生になれなかったれん。わたしも習字でちょっとなやんでいる。わたしは、小学校一年生の三月からずっと習字を習っている。始めたきっかけは、もっと字がうまくなりたいと思ったからだ。毎月の作品てい出で一つずつ級が上がり、四年生になって二段まできた。ところが、そこから三ヶ月ずっとかわらないのだ。ちゃんとお手本を見て何回も練習しているのに…どうしてだろう。もうむりかなと思ってしまう。もやもやした気持ちでいっぱいのれんと同じだ。

れんは、もやもやした気持ちをふりはらいたくてすいすい川原クラブという水泳の教室に通い始めた。あきらめずに前に進んだのはえらいと思う。その水泳クラブでれんはコー

千の春さんや同じ四年生の海音や陽太に出会う。この出会いでれんはかわっていく。春さんの分かりやすい教えや、陽太や海音のなやみやよさに気づくことで、がんばろうとする気持ちがわいてきたのだと思う。とっくん生になれなかったことで、みんなに出会い、今じゅうじっ感でいっぱいなのだとれんは気づく。わたしも、習字で二段になれないのは字のバランスが悪いのかなと思い、宿題で漢字の問題が出た時に字のバランスが取れるまで何回も消して書き直すことをつづけた。今回もじゅん三段にはなれなかった。けれど、こう筆でなんと三段に上がり、おどろいた。練習したことはむだではなかったのだ。『物事はそんなたんじゅんじゃない。』て。がんばったけっかはそれだけじゃない。』て。『というれんの言葉は、正かいは一つではないということだろう。うまくいかないことがあっても、けっかがだめでも、やってきたことは決してむだではないし、それが次につながっていく

のだとわたしは思う。

れんや陽太、海音は、それぞれどうなりたいかを考え、目標をもった。わたしも習字の目標についてあらためて考えてみた。字がもっとうまくなりたいと思って始めた習字だが、今は習字の段でさい高の八段をとりたい。そして、子どもに習字を教える先生になりたい。わたしは字を書くのがすきだ。「字がうまいね。」と友達や先生にほめられると、とてもうれしい。自分のよさを生かしてさらにレベルアップしていけるように、いろいろな字のコンクールにちょう戦したり、ポスターやお知らせを書いたりするなど、目標を達成するために、まだまだこれからやれることがたくさんある。いろいろな人と出会って、自分以外の考えを聞いて自分の考えにプラスしていってれん。わたしも友達の考えを聞いて、自分にできることをふやしていきたい。

わたしはいっ。たい、いつじゅん三段になれるのだろう。でも、ぜっ。たいあきらめない。

「れん、わたしもまだまだここからがんばるよ！」

「まだまだここから」

宇佐美牧子・作

ポプラ社

B4（20×20）こだま原稿用紙は再生紙を使用しております。

「おすれていいから」を読んで

陸前高田市立小友小学校

四年　村上　虎太郎

ぼくの大切に飼っていたねこのひなちゃんが、なくなった時、お母さんがこの本を買ってくれました。ぼくのうちには、今、三びきのねこたちがいます。これまでに、ひなちゃんを合わせて四ひきのねこたちとくらしてきました。だんだんぼくと、うちのねこたちとの関係にているように思えて興味をもち、読んでみようと思いました。この「おすれていいから」という本は、表紙やさし絵がとても心に残る絵本です。とても短い文章だけど、すごく心にのこる本でした。「おれが家に来た日、生まれたばかりのおまえがいた。ここはおれたちのなわばり」。ねこが主人公で、男の子の成長がねこ目線で書かれています。

ぼくが心に残っている場面は、「おれはどんどん大きくなっておまえはゆっくり大きくなった。だからおれの方が兄貴だぜ。」と言っ

ているところです。なまいきさが、ねこらしいがらです。ぼくのうっていたれんちゃんもにたところがあって、三才の時のぼくがあないで起きていると、ぼくの布団に来てねがしつけていく姉貴でした。

ぼくのお母さんが、本を読みながらこんな話をしてくれました。

「ねこは、人間と成長速度がちがうんだよ。ねこの方が早く成長するから大事にしなきゃね」。

絵本では、男の子が大きくなるにつれてねこのそばにいないことが多くなっていきます。「おまえはすっかり大きくなったのに、おれは少し小さくなった気がする」と言っているねこが、少しさみしそうだなぁと思いました。ぼくのねこもそんな風に思っているのかなぁと考えてしまいました。

もう一つ、心に残っている挿し絵があります。男の子がまだ小さい時に窓辺でねこと座っている絵と大きくなった男の子とねこが二

2

人でいる絵の描写です。月日がすぎても、その
の窓辺は変わらなくて「ここはおれたちのだ
わばり」なんだなぁと思うような絵で、好き
です。大きくなった男の子が家から巣立つ時、
その窓辺に一人いたねこは、「あぁそうか。
おまえ新しいなわばりを見つけたんだな。元
気でな。おれのことはわすれていいから」と
言います。ねこと男の子の関係性がすごく良
くて、ねこは大事にされていたんだなと感じ
ました。もし大事にされていると感じていな

3

かったら、「あぁ、捨てられたんだなぁ」と
か「おれをおいていくんだ」になると思うか
らです。ねこが言った「おれのことはわすれ
ていいから」は、巣立っていった男の子に、
「はなれていてもおれはおまえを応えんして
いるぞ」いつかおまえが帰ってくる時までこ
の場所を守っているから、安心しろよ。そう
言っている気がしてなりません。ぼくも飼っ
ているねこたちを大事にしていこうと心に決
めました。

そっとあたたかく包んでくれる光

岩泉町立小川小学校　六年　中村　拓海

ドイツ語で「光」を意味する言葉、それがこの本のタイトルである「リヒト」だ。この本を開く前、ぼくは表紙から何かキラキラしたまぶしい物語を想像していた。しかし、読み進めると、そこにえがかれていたのは、決して明るいばかりではない、人間の心の奥にあるもやもやした人間関係だった。

主人公の理人は祖母の節さんから中身の分からない封筒をたくされ、なぜか「苦手なあいつ」と一緒に遠くはなれたドイツに行くことになる。ぼくは自分が理人の立場だったら気まずい相手と海外へ行くなんて、絶対に嫌なので、理人に強く同情してしまった。

物語の舞台であるクリスマスマーケットは、文章を読んでいるだけでも、きれいで寒そうで、でもどこかあたたかい光に包まれているような景色が目に浮かんできた。そんな美しい場所で、理人の心は激しくゆれ動く。言葉

も通じない異国の地で過ごすうちに、理人はこれまで知らなかった「苦手なあいつ」の意外な一面や、いいところを少しずつ発見していく。そして、節さんが自分にたくした封筒の本当の意味を知ったとき、理人の家族に対する見方が変わっていった。

ぼくは理人が自分の思いこみに気付き、周りの人のことを新しい見方で見つめなおす場面が一番心に残った。人間はだれでも、自分の見たいような見方でしか相手を見ていないのかもしれない。理人の姿から、ぼくも自分の心のせまさに気付かされた。

ぼくはちょっとしたきっかけで「あの人とは合わない」と決めつけて、最初から話そうとしなかったことがある。そんな自分をふりかえり、相手の言葉や行動のうらにどんな気持ちがあったのか想像することをさぼっていたのかもしれないと思った。理人がドイツでの経験を通して、「苦手なあいつ」の「本当の姿」や「優しさ」を知っていったように、

ぼくが見ている友達の姿も、ほんの一部だと気付いた。だれの心の中にも、他人には言えない悩みや、うまく表現できない優しさがかくれている。それに気付こうとするか、目をそらしてしまうかで、ぼくが見ている学校の景色もガラリと変わる気がした。

この本を読み終えたとき、「リヒト」という言葉のひびきが初めに感じたものと全くちがうものになっていた。それはただ暗闇をまぶしく照らし出すだけの光ではなく、迷ったり悩んだりしているぼくたちの足元をそっとあたたかく包んでくれるような光だと思った。

ぼくはこれから友達と意見がぶつかったり、苦手だなと思う人に出会ったりするだろう。そんなとき、この本のことを思い出して、相手の言葉のおくにある気持ちに、少しだけ想像力を働かせてみたい。そして、理人がドイツで新しい自分を見つけることができたように、ぼくも自分のからを少しずつ破りながら前を向いて進んでいきたい。

1

本当の色は、一つじゃない

紫波町立赤石小学校　六年　金田　真由子

「きれいな色も、みにくい色も。角度次第で、どんな色にだって見えてくる」。物語の主人公「ぼく」のこの言葉が、私の心に深く残った。私達は普段、いい人の色は「きれいな色」に、苦手な人の色は「みにくい色」にざっくり分けてしまいがちだ。でも、森絵都さんの「カラフル」を読み、私は人はそんな単純な一色だけではないのだと、強く思った。

2

過去に大きな過ちを犯して死んだはずのぼくは、天使の「プラプラ」に導かれ、自殺しようとした中学生「小林真」の体にホームステイすることになった。一見周りの環境は最悪だった。父親は出世して舞い上がり、母親は不倫をしていて、兄は真に冷たい。学校でも真は一人ぼっちでさびしい生活を送っていた。ぼくの目に映る真の世界は、真っ黒な「みにくい色」でぬりつぶされていた。

しかし、ホームステイを続けていくうちに、

ぼくは気付いていく。父親が真のために不器用な優しさを見せてくれていること。母親が真のことを心から深く愛していること。そして冷たい兄は、実は誰よりも真の将来を心配してくれていたこと。真の世界がみにくかったのではなく、ぼく自身がそう見える一つの角度からでしか周りを見ていなかったのだ。

3

私にも苦手な友達がいる。その子はいつも口調が強めで、私は勝手にその子に対して「ちょっと苦手な子」という黒いイメージを持っていた。でもある日、理科の授業の中でみんながやりたがらない係を率先してやってくれた。イメージと違う光景に不思議な感覚だった。そしてこの本を読んで気付いた。私が最初に見えていたその子へのイメージは、その子のほんの一部で、角度を変えてみれば、実は優しくて正義感のある一面ももっていることに。その子が黒い部分をもっているのではなく、自分がきれいな色を見逃していただけだったということに。

4

人間は、一色だけでできているのではない。誰もがたくさんの色を持っていて、グラデーションのように混ざり合っている。ある角度で見たら意地悪な人も、また違う角度で見たら優しい人なのかもしれない。その時の気分や見る角度で、その人の色はいくらでも変わって見えるのだ。

「カラフル」という題名の通り、この世界や人間は様々な色で満ちあふれている。大切なのは、最初に見えた一色だけで人を判断してしまわないことだ。これからの私と、友達や家族にみにくい色が見えたとしても、すぐに目を背けたり、距離を取ったりしないで、一度立ち止まって、違う角度からその人の別の色を探せる人でありたい。きれいな色もみにくい色も、たくさん見つけ合い、認め合えたら、本当の「カラフル」な世界になるのではないだろうか。私はたくさんの色を認め合える、カラフルな世界を、自分の目で作っていきたいと思う。

原稿用紙 20×20

見えているもののその先

花巻市立湯口中学校一年　伊藤　駿介

「宇宙人はいると思うかね？」

本の中に出てきた問いに対し僕は、「いてほしい！」と思った。宇宙人がどんな姿をしているのか。どこに住み、どのような生活をしているのか。考え始めると、さまざまな想像が広がり、わくわくした。しかし、この問いは、ただ想像を楽しむだけのものではなかった。

地球の生命のもととなった水や有機物は、いったいどこから来たのか。その答えは、まだ解明されていない。地球の外から運ばれてきたのではないかという説もあるという。

もしそうなら、宇宙のどこかに生命が生まれるための材料があるのかもしれない。「リュウグウの砂に挑む」で紹介されていた研究は、そんな生命の起源に関わる謎を解き明かそうとするための研究だった。

研究とは、特別な知識を持った人が難しい

実験や調査をするものだと思っていた。しかし、詰め進めるにつれて、研究に必要なのは、特別な知識を持っていることだけではなく、分からないことを知ろうとし、考え続ける姿勢の積み重ねなのではないかと気づき、少しずつ身近なものへと変わっていった。

宇宙の研究は、自分からは遠い世界の話のように感じていた。しかし、その研究には、数学や理科など、今学校で学んでいることをもとにした知識が使われていた。普段習っていることが、まだ誰も知らない宇宙の謎を解き明かすことにつながっていると知り、身近な学習が急に大きな世界へ広がったように感じた。

中でも僕の考え方を変えたのが、動いているようには見えない石の中でも、元素が動いているという事実だ。僕にはただの石にしか見えないその中で、目には見えない変化が起きていると知ったとき、僕は目に見えていないところに、まだ知らないことがあるのではい

ないかと思った。

いつも一緒にふざけたり、ゲームをしたりする仲の良い友人。僕はその友人のことをよくわかっているつもりだった。ところが、中学校で初めてのテストでの点数を知って、とても驚いた。普段の様子からは想像できないほどよい点数だったからだ。僕が見ていたのは一緒に遊んでいるときの友人だけだった。家で勉強している姿や、一人で努力しているところは見えていなかったのだ。

僕はニュースを見るときにも同じことを感じるようになった。災害が起きたというニュースの映像。数分で終わる映像のその先には、そこで生活している人々がいる。家に帰れないもどかしさ、仕事や学校の心配、いつまで続くのかわからない先の見えない不安。映像が伝えるのは出来事の一部で、その先には画面には映らないさまざまな思いや現実が続いているのだ。

そして、著者の伊藤さんの姿から、僕はり

リーダーについての考え方が変わった。研究では、さまざまな知識や経験をもつ研究者が、一つの目的に向かって力を出し合っていた。意見がぶつかり、思ったような結果が出なくても、違う方法や視点から考え直し、挑戦を続ける。伊藤さんはチームのリーダーとして、一人ひとりと丁寧に向き合い、全員が力を発揮できるようにしていた。また、誰一人取り残されないよう、同じ情報を同じタイミングで共有させていた。

僕はこれまで、リーダーとは先頭に立ってみんなを引っ張り、指示を出す人だと思っていた。しかし、リーダーに必要なのはそれだけではなかったのだ。一人ひとりの考えや得意なことを理解し、それぞれの力を最高に生かせる環境をつくることも大切な役割だった。

研究とは、そんな最高の環境の中で、かけがえのない仲間と協力し合いながら、分からないことに向き合い、新しい答えを探し続けることなのだと感じた。

「宇宙人はいると思うかね？」

最初は「ついてほしい！」と思ったこの問いが、今は少し違って見える。まだ分からないからこそ知り、その可能性をいつか見つけてみたいと思うようになった。

石の中で動いている元素、友人の見えなかった努力、ニュースのその先。この本が教えてくれたのは宇宙の謎だけではない。目に見えるものだけでわかったつもりにならず、まだ見えていないものを知ろうとすること。そして、すぐに答えが出なくても、考え続け、挑戦し続けることだ。

見えているもののその先。意味のないように見えるものの中に、いつか自分を支える大切な何かが眠っているかもしれない。リュウグウの砂がそうだったように、未来の自分をつくる源が、「ゆりかご」に宿られ、見えていないところにあるかもしれない。だから僕は、見えるものだけを見て決めるのではなくその先にある可能性を探し続けていきたい。

1

なんで僕たちが銃を持つの？

栗石町立栗石中学校三年　小田中　彩芽

私たちが毎日当たり前のように通っている学校。そこは本来、新しい知識を学び、友と笑い合い、自分の未来に夢を膨らませる場所であるはずでした。しかし、今から約八十年前のこの国には学ぶことさえ許されなかった子どもたちがいたのです。

「子どもも兵士になった」を手にしたとき、にわかに信じられない気持ちを抱きました。

2

十四歳以上の少年たちが「兵士」として駆り出されていった歴史。それは現代の同調圧力の中で生きている私たちに生きることの本当の意味を考えさせてくれた一冊でした。

私たちは「戦争」という言葉を日常的に耳にします。歴史の授業やニュースの報道、あるいは映画や小説の中など触れる機会は少なくありません。しかし、それらはどこか遠い国の出来事のように感じられ、その本質を本当の意味で理解しているとは言い難い状態で

した。教科書の中の記号的な数字として処理していたのが正直なところです。

ですが、本書を読み終えた今、戦争がもつ圧倒的な不条理さと人間の尊厳を根底から否定する恐ろしさでいっぱいです。

本書で描かれているのは、太平洋戦争末期の沖縄戦においてわずか十代で兵士として戦場に駆り出された少年たちの姿です。

戦争が始まると社会の価値感は一変してしまいます。本来、一人一人の命やその未来の可能性は何よりも尊重されるべきものです。

しかし、戦争という状況下での命は単なる「兵力」という数字や資源に置き換えられ、個人の意思や感情は完全に無視されます。学校の廊下でふざけ合ったり、家で美味しいご飯を食べる、そんな当たり前の人間らしさがすべて「兵士」として塗りつぶされていく無個性化が何よりも恐ろしいと感じました。

さらに私が深く考えさせられたのは、戦場における「加害と被害」の連鎖です。少年た

オキナ 20×20

ちは猛烈な攻撃に晒される被害者であったと同時に、自らも武器に手をとり敵を倒すための兵士として行動していました。人間は本来、他者を傷つけることに強い抵抗を覚える生き物です。目の前の誰かが苦しんでいれば手を差し伸べたくなるのが人間の本来の優しさではないのでしょうか。

しかし、戦争という環境はそのまともな倫理観さえ麻痺させてしまいます。「殺さなければ殺される」という極限状態に追い込まれ

生き延びるために他者の命を奪うことを強要されるのです。それは肉体的な死だけでなく精神的な追い込みも意味します。戦争は、関わるすべての人々を被害者にし、同時に加害者に仕立て上げます。

では、このような戦争の恐ろしさを踏まえた上で現代の私たちは何を教訓とし、どう行動していくべきでしょうか。

一見平和な現代ですが、歴史の教科書には数々の戦争の記録が刻まれています。何千万

人もの命が奪われ、街が焦土と化した惨劇を私たちは記憶するだけでなく、遺された教訓を未来へ語り継ぎ平和のために具体的な行動に変えていかなければなりません。

それは「対話による互いの理解の重要性」と「平和は守り続けていく努力が必要」という二つの点です。平和は一瞬で崩れるからこそ他者への寛容さを失わない自覚が欠かせません。さらに戦争で起きる加害と被害の二面性は現代でも日常的に潜んでいることが多いです。戦争の記憶が薄れる今、過去を想像し身近なところから平和を意識することが必要です。身近な平和を守ることは一見すると簡単なことのように思えます。しかし、私たちは日常の小さな対立すら解決できないことがあります。この「身近な平和すら守れない」という人間の弱さや難しさの延長線上に国と国が戦う「戦争」があるのではないでしょうか。学校のいじめをなくすことも第一歩となります。犠牲になった方々の声を無駄にしな

いために私たちは教訓を次の世代に繋いでいくべきです。戦後約八十年が経ち、私たちは平和な世界で暮らしています。この平穏は多くの尊重されるべきだったたくさんの犠牲の上で保たれているものです。

本の中でたくなった友を思い平和を訴える当時少年だった生存者の姿に触れました。彼らの言葉は単なる歴史の記録ではなく一人の人間としての思いです。その重みをしっかりと受け止めなければなりません。本書では死

を恐れながらも生きることを望んだ少年たちの悲しみや生き残った後の苦しさを描いています。また彼らは平和への願いを強く訴え二度と戦争を繰り返さないでほしいという切実な思いを語っています。十分な訓練もなく爆弾を背負わされ「生きたい」と願った少年たちの姿をこの本を読んで知ってほしいです。

犠牲になった方々の安らかな眠りを祈るとともに人間がもつ弱さと向き合いながら生きていきます。

オキナ 20×20

名前 新美里咲

（1枚目）

戦後八十年。この言葉の響きは十代の私にはピンと来ないが、記憶に新しいところでは、コロナ感染症や自然災害などの天災が私達を巻きこんできた。昨今では、岩手で起こった林野火災。ニュースをつけたときに流れた町の様子は、戦禍をイメージするような炎が山を覆っており、戦後の焼け野原という形容もあった。これまでの自分を振り返ると、戦争は過去のこととという言葉で壁をつくり、自分ということのものに関係性を求めることに違和感を覚えていた。今思えば、私の戦争に対するイメージは幼稚で浅はかなものである。

戦争を題材にした映画やドラマで、演じる役者の涙につられたあの感情は一体何だったのだろう。確かに悲しくて、虚しくて。でもそこに、戦争の影を理解して流した涙が一粒でもあっただろうか。戦争の美化と風化。感じ取ることが出来なかったあの頃の自分に言ってやりたい。「戦争を甘く見るな」と。

著者である早志さんの幼少期は幸せな記憶

（400字）

名前 新美 里桜

（2枚目）

であふれていた。大好きな歌や踊り、暖かい家族で彼女を満たした。あの日までは。八月六日、耳をつんざくような轟音とともに、すべてを失った。大切な思い出が詰まった家も、町も。足を踏み入れる場所には死体の山があり、川にはお腹が大きく膨れた死体が流れ、血と汗が混じった悪臭が鼻をさす。考えただけでも吐き気がする地獄絵図のような話にページをめくる手が止まった。

私ならどうだろうか。九歳というまだ幼い頃の私の思い出にもし戦争という重い霧がかかっていたら。トラウマなんて言葉じゃ伝わらないほど、脳裏に焼き付いて離れず、一生心に傷を負うだろう。中学二年生の早志さんがかいた手記には、「ああ、いやだ、いやだ、いやだ」という文章がある。戦争は絶対にいやだという文字何度も繰り返される「いやだ」という三文字には、あの恐ろしい戦争の記憶が、どれだけ彼女の心身に影響を与えたのかが痛いくらいに伝わってきた。それはたとえ戦争が終わっ

SUNTORY 青少年読書感想文全国コンクールを応援しています

名前 新美里栄

（3枚目）

うが、辛い過去としていつまでも記憶に残り、その後の人生にも響くことだろう。

例えば、差別。早恋さんは被爆者というだけで差別を受けた。私達にとって、就職や結婚や出産といった人生の節目はめでたいはずだ。でも被爆者はろがう。一結婚は仕方がないが、子供は諦めたほうがいい」と、冷ややかに放たれた言葉に、私も耳を疑った。素直に暖かい言葉が向けられるとは限らない悲しい現実に胸がずっと締め付けられた。

私には広汎性発達障害という自閉症疾患を持っている兄がいる。障がいという世間一般がもつネガティブなイメージは、私自身も兄自身も縛られていた部分があった。「障がいがあるから可哀想」と何度も言われたことがあるが、私は兄のことを可哀想だと思ったことは一度もない。「兄を障がい者ではなく、一人の人間としてみてほしい」とずっと胸に秘めていた思いを人に伝えたいと思い、勇気を出して昨年「私の主張」に出場し、述べる

SUNTORY 青少年読書感想文全国コンクールを応援しています

名前 新美里桜

（千枚目）

ことが出来た。一障がいというくくりで区別せず、お互いの輝きを讃えある社会を目指したいという思いを、早志さんの姿に重ねていた自分がいた。もちろんこれは想像だ。

早志さんがどう思われたいかなんて本人にしか分からないのだから、ここからは勝手な私の解釈となる。早志さんは、自分自身は被爆者であるという縛りに苦しんでいたのではないか、一人の人間として見てほしいと思っていたんじゃないかと私は考える。でもその本心を感じ取ることができないのは、私が被爆者でもなければ戦争の本当の知識もなく、自分の中で美化されていた戦争の影と本当の姿だと思いこんでいるからである。

そんな私達に今できることは何か一緒に考えてみてほしい。自分の祖父母でさえ生まれていない昭和二十年の悲惨な出来事と現代の平和な毎日。この距離を埋めるために大切なことは、戦争の本当の姿を風化させないことだ。この本に出会わなかったら、きっと私は

SUNTORY 青少年読書感想文全国コンクールを応援しています

名前 新美里桜

（5枚目）

何も知らないまま、残りの人生を歩んでいたことだろう。今は被爆者も減ってきており、教訓を後世につないでいく動きを維持することが難しくなっている。早志さんの他にも核の怖さと身をもって体験し、心と体に深い傷を抱えながら生活している方々がいることも忘れてはならない。

「愚かな戦争などのない平和な二十一世紀にしたい。」このまっすぐな早志さんの思いが形になってほしいと心から願っている。そのためには、この本を手にとった十代、二十代が戦争を過去のことだと壁をつくらず当時の様子を風化しないように行動するべきだと思う。

戦後八十年。この言葉は、今の私にとって単なる歴史上の数字ではない。戦争の悲惨さを知り、その記憶を受け継ぎ、平和な毎日を当たり前と思わずに生きていく。その責任を私達の世代が担っていかなければならないとこの本は教えてくれた。

SUNTORY 青少年読書感想文全国コンクールを応援しています

多様性、何、を思い浮かべますか？

岩手県立盛岡北高等学校　二年　亀井　壮亮

「多様性」という言葉を、私はこれまでどこか「無難な正解」みたいに扱っていたと思う。学校の授業でもSNSでも「個性を大切にしよう」とか「みんな違っていい」という言葉は当たり前のようにあふれているし、自分もそれに特に疑問を持たず、なんとなく分かった気になっていた。しかし「正欲」を読み終えた今、その理解はとても浅くて、自分にとって都合の良いものだったのではないかと思うようになった。むしろ私は、「理解できる範囲のものだけ」を勝手に「多様性」と思い込んでいただけだったのかもしれない。

この物語には、立場も環境も全く違う複数の人物が登場する。不登校の息子にどう向き合えばいいのか分からず戸惑う父親、自分の性的な感覚を隠して「普通の人」として生きようとする人、他人との関わりを避けて孤立している大学生など、一見すると接点が無さそうな人たちばかりだ。しかし読み進めていくうちに、彼らに共通しているのは「普通」

コクヨ　ケ−70　20×20

から外れてしまうことへの強い不安と、それによって生まれる深い孤独だと気が付いた。周りに合わせようとしても合わせきれない、でも本当の自分を出せば拒絶されるかもしれない。その板挟みの中で生きている苦しさが、静かではあるが確実に伝わってきた。

特に、水や噴水に対して特別な感情を抱く人たちの描写は、最初はよく理解できなかった。「どう受け止めればいいのだろう」と戸惑った。しかし段々と、それは単なる「変わった趣味」ではなく、その人にとっては生きていく上で切り離せない、とても大切な感覚なのだと分かってきた。自分にとっては当たり前ではないものでも、誰かにとってはそれがあるからこそ生きていけるものなのかもしれないと思うと、簡単に否定することはできないと感じた。

ここで私は、自分がこれまで「理解できるものだけ」を「多様性」として受け入れていたことに気が付いた。例えば、性的マイノリ

テイや不登校といったテーマについては「大変そう」とか「その人らしくて良いと思う」と言っていたけれど、それは結局、自分が想像できる範囲の苦しさに当てはめていただけだったのではないかと思う。物語のように、自分の感覚から大きく離れていて、すぐには共感できないものに対しては、最初から距離を置いてしまっていた。分からないものを分からないままにしておくのではなく、「自分とは関係ないもの」として切り離していたのかもしれない。

特に印象に残ったのは、不登校の男児の父親である啓喜の存在だ。彼は息子の将来を本気で心配し「正しい道」に戻そうとする。その姿は一見すると責任感のある親であり、間違っているようには見えない。しかし話が進むにつれ、その「正しさ」が本当に息子のためだったのか、少しずつ分からなくなっていった。そこには「周りから普通に見られたい」とか「自分の安心を守りたい」という気持ち

も含まれていたのではないかと思う。

また、水に対して特殊な指向を持ち、「普通」になれずに生きてきた夏月と佳道の関係も強く印象に残っている。二人にとって水は特別な存在であり、それを共有できる相手がいること自体が大きな救いになっていた。誰にも言えない秘密を分かち合い、「否定されない場所」を持てることが、どれだけ大切なことなのか。完全に理解し合えなくても、「そのままでいい」と思える相手が一人でもいることが、人が生きていく上で大きな支えになるのだ。

物語の後半、彼らの存在が周囲に知られ、強い批判にさらされる場面は読んでいて苦しかった。知らないものに対する不安や恐れを感じ、それを「正義」の言葉ですり替えて誰かの居場所を奪ってしまう。この本は、その無意識の怖さをはっきりと見せつけてきた。

「正欲」を読んでから、周りの景色の見え方が変わった。電車で隣に座る人やクラスメ

イトの内側にも、私には想像もつかない「切実な何か」があるのかもしれない。全てを理解するのは難しいが、大切なのは「自分には分からない世界がある」という前提を持つことだ。その上で、相手を勝手な物差しで否定しない。その静かな許容こそが、本当の意味での多様性に繋がっていくのではないか。

これから大人になる中で、「普通」を求められる場面は増えていくと思う。そのときに、自分の物差しだけで他人を判断しない人間でありたい。この本で感じた居心地の悪さを忘れず、分からないものに出会ったとき、「そこにもう一つの人生がある」と一度立ち止まって想像する。自分の中にある「普通」を疑い続ける誠実さを持ち続けていきたい。

答えのない問いに向き合い続けることこそが、本当の意味で他者を尊重することに繋がると、私は今、強く確信している。